北海道で過ごした夏

デイヴィッド・マープルズ（アルバータ大学／センター 2014 年度特任教授）

小樽運河で（マープルズ氏と夫人の文さん）

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターに滞在したのが私にとって初めての日本だったわけではない。初めてどころか、それまでにも本州の各地や沖縄などに 8 回ほど訪れたことがある。私の妻の文（あや）は神戸生まれで、両親と兄弟は今もそこに住んでいる。そんなわけで、スラ研の大須賀さんと何度もやりとりをしたおかげもあり、カナダはアルバータ州エドモントンから東京経由で千歳空港に到着した際、これから見るだろう物事については、率直に言って予測ができていた。

札幌は北海道では飛びぬけて大きな都市である。活気に満ちた賑やかな街は、あちこちに広々とした公園が設けられ、中心街の大通りには心地よい緑地帯があって、夏にはテレビ塔の影の下でサービスの行き届いたビアガーデンが開かれる。交通機関は便利だし、多くの人が利用しているように、自転車で移動して回るのも楽でよい。とはいえ自転車は車道よりも歩道を好んで、歩行者の間をすり抜けながら走るのである（私もその一人となった）。

文と私は中島公園を見下ろす場所にあるアパートを住居に選んだ。そこは見晴らしのよいところで、7 階に住む私たちは一方の窓からは藻岩山、もう一方からは公園を見渡すことができる。夕日の眺めは格別に素晴らしかった。アパートには二つも寝室があったが、冷房があるのは小さいほうの寝室の隣にある居間だけだった。北海道大学は中島公園から地下鉄で 4 駅なので、毎朝の通勤の出だしは公園の池のそばを、職場に着く前は大学のキャンパスの中を気持ちよく散歩することができた。

スラ研はテニスコートを見下ろす連結した建物の一角にある。初めて訪れる人にとっては図書館を通って入るのが分かりやすいが、やがて私はいくつかの近道を見つけ出した。スタッフは人当りがよくて親切だった。ベラルーシとロシアの文学を研究している世話役の越野さんは、図書館と研究所内の案内をしてくれた。私は最上階の 5 階に、パソコン、ソファ、小テーブル、椅子、デスクのある大きな部屋をもらった。5 階では専任教員と外国人研究員が仕事をしている。私がまず知り合いになったのは、田畑さんと御夫人の朋子さん（お二人とはアメリカに共通の友人がいる）、望月さん、そしてカナダの同僚、トロント大学のトマス・ラフーセンだ。彼はハルビンについてのドキュメント映画を準備していた。

スラ研の家田修センター長は、御夫人の裕子さんと同じように、気遣いの素晴らしい人で、文と私が大学院生や若手研究者と知り合いになる親睦の場を何度も設定してくれた。そうした催しの多くは二階にあるセンター長室で行われた。私たちはそこで元センター長の人類学

者にもお会いした。北海道やそのすぐ北にあるサハリン島南部のアイヌについての話で私たちは大いに楽しませてもらった。彼が研究の対象としたブロニスラフ・ピウスツキ（ユゼフの兄）は、流刑の間にアイヌの生活を調査した（アイヌの村に住んでアイヌの女性と結婚した）という。アイヌは日本の先住民だったが、やがて北方の島への日本帝国の進出と占領に屈してしまう。

北海道大学を夏に訪れた人は次の二つの点に気がつくだろう。まず第一にはカラスの存在である。北アメリカのカラスとはちがって、獰猛なくちばしをもった大きな鳥だ。奴らは大勢で群れを成している。アルフレッド・ヒッチコックの往年のホラー映画『鳥』も見劣りするほどの光景だ。奴らはそこに巣をつくっており、明らかにそのせいで侵入してくる者に敵意をむき出しにする。今までの人生でカラスが人を襲うなんて考えもしなかったのだが、奴らは実際に襲ってくるし、しばしばペアを組んで急降下爆撃を仕掛けてくるのだ。大学当局が巣を除去するまで、1階の入口を通ってセンターに入るのは非常な危険をともなうことだった。その後、恐れを知らないカラスの軍団はテニスコートの近くに再結集した。これが第2の問題点とつながってくる。

学生たちは昼間のテニスコートに集まってくる。彼らはおそらくテニスと思われるゲームに興ずる。しかし実際はもっと複雑怪奇なものである。時には6人が同時にゲームに加わることがあるし、その他にも男女の応援団がイカレたポゴダンスのようにぴょんぴょん跳びはねたりもする。さらに選手たちはうなり声による符丁を共有している。その響きは羊と怒った牛の鳴き声の中間くらいだ。最初のうなり声は別のグループの発声によって繰り返される。叫び声は朝早くに始まって、私が職場を去る夜まで続き、時には土砂降りの雨にすら影響されない。田畑さんはある時点で苦情を訴えたようだが、返ってきた通知によると、うなり声は学生の伝統であり、田畑さんは慣習を理解していなかっただけということらしい。率直に言って私も理解はできないけれど、うなり声と共存することを学んだ。

私たちは早々とこの素敵な街を探検して歩いた。札幌は冬のリゾートだけれど、夏もまた様々な催しがあって楽しい。見ごたえのある花火大会、ジャズやフォークのコンサート、神社のお祭り、中島公園の立派なコンサートホールで開催される演奏会、ラーメン店、ススキノのナイトクラブ。そして、日本の有名銘柄であるサッポロ、アサヒ、キリンなどを注文して、昼の屋外で飲む冷たいビールはもちろん外せない。私たちは藻岩山の年間パスポートを購入した。都合3回、ロープウェイとケーブルカーを乗り換えて頂上に登り、都市を見下ろす素晴らしい眺望を楽しんだ。昼の眺めと夜景の両方ともである。

天狗山登山

家田先生と裕子さんは、文と私を小樽にある自宅に招いてくれた。日本海のある西に向かって小一時間ほど電車に乗った。最初に訪れた魚市場では、マグロ、ウニ、カニなどが並ぶびっくりするような光景を見ることができた。私たちは後でハッカクを試しに食べてみた。

小樽で私は家田先生と学生や若手研究者のグループのエクスカーションに同行した。最初の行き先の天狗山では、やはりロープウェイに乗って行くと、頂上には博物館がある。私は

京都でも天狗に遭遇したことがあるが、ここの方が天狗の伝説をうまく生かした展示になっているように思えた。博物館には大量の天狗が収められており、そのどれもが例の大きな鼻を備えている。日本版のピノキオといったところだろうか。ただし伝承が本当だとしたら、天狗の鼻は幸運をもたらすようだ。私は学生たちと一緒にロープウェイの建物の外にある天狗の像の鼻をなでた。偶然ながら伝説上の天狗は人間と猛禽の特徴をあわせ持っているというので、先述したカラスの出来事もこれで説明がつくのかもしれない。

日本海の眺めは忘れがたい。遠くをフェリーが南の舞鶴に向けて乗客を運んで行く。家田先生によると 30 時間はかかるという。北西の方角にはロシアがある。遅くなったけれどここで私の道連れを確認しておこう。森下さん、金山さん、川渕さん、カマロフさん、それに中国の留学生が一緒だった。そのほかに家田先生とお嬢さんの亮子さんが加わる。中国人たちは日本語と多少の英語を話すことができた。

天狗山の次に私たちはバスに乗って、ニシン御殿を訪れた。小樽市の中心から離れており、水族館に近いところにある。最後に見学を予定していたのは 1904 ～ 05 年の日露戦争後に両国の使節団が会合した建物だったが、閉鎖されていたので、北海道で唯一という小樽市内のモスクを訪問した。そこで私たちはパキスタンから来たという二人の男性に迎えられた。私たちはコーラとセブンアップをふるまわれ、モスクの絨毯の上でメッカの方を向いて飲み物をいただいた。その合間に、年配の男性の娘さん（アメリカで教育を受けたという）がモスクの活動について解説してくださった。

洞爺湖を背景に

8 月に文と私はレンタカーを借りて洞爺湖を訪れた。壮観な姿を見せる火山と湖のある地域で、札幌からはちょうど 2 時間の距離だ。私たちは丘の頂に坐するウィンザーホテルで素晴らしい食事をとった。私たちは温泉が魅力的な登別と山奥にあるクマ牧場にも出かけた。熊が後ろ足で立ちあがり、観光客が自販機から 300 円で購入できる餌をねだるというシュールな環境だった。

文も私もスラ研の同僚たちの専門知識と研究設備にお世話になった。大学図書館はスラブ地域の立派なコレクションを有しており、私が研究しているウクライナについてさえ、私の所属する大学と同じくらいの資料を持つ。つまりそれは北米にある図書館の大多数よりも優れているということだ。初めのうちは蔵書の検索に時間がかかるが、調べるかいはあった。私にとってのハイライトは毎月の大学院生セミナーだった。これは斎藤さんが企画していて、カザフスタンのアセリ・ビタバロヴァさん、辛嶋さん、後藤さん、森下さん、河津さん、それにアフリカから来た経済学部博士課程のジョン・カレンガさんたちが出席していた。

7 月にはスラ研で 1914 年から 45 年にかけてのユーラシアの「危機の 30 年」に関する大きなシンポジウムが開催され、アメリカ、イタリア、トルコ、そして日本の各地から研究者が参加した。刺激的で熱のこもった 2 日間の後には、アイヌ博物館と北海道開拓の村という 1868 年から 1926 年にかけての時期の北海道各地の建物を集めた野外博物館へのエクスカーションが企画されていた。バスの中で愉快な英語の通訳をしてくれたのは、主催者であるスラ研の宇山さんと地田さんだった。

文もウクライナのユーロマイダンに対するカナダの反応とウクライナ人移民コミュニティの役割という彼女の最近の関心に近いテーマで報告を行った。全体として文が一緒にいるおかげで信じられないくらい楽に暮らすことができた。一人で来たらわけが分からなかっただろうことが理解できたし、いろいろな場所を訪れることができた。彼女自身もシンポジウムに出席して議論に加わり、スラ研とその活動によく適応していた。とはいえ彼女の姿がよく見られたのはどちらかといえばキャンパスに近いゴージャスな大丸デパートの方だったけれど。

スラ研に来て仕事をするというのは、理想的な環境でほとんど邪魔されることなくプロジェクトを仕上げるには又とないチャンスである。実際、教授たちはたいがい研究室に閉じこもってビーバーのように日が暮れるまで働いている。何かで困ったときに私がまず連絡をとるのは事務室の阿部さんだが、彼女はどんな些細な問題でも手助けを惜しむことはなかった。文と私は阿部さんとご主人でスラ研の文化人類学者の後藤さんと仲の良い友達になった。私がスラ研で過ごした比較的短い期間は、要は夏の間だけだったけれど、驚くほどに生産的に過ごすことができた。ウクライナのユーロマイダンについての本の編集をほぼ終わらせただけでなく、長めの論文をひとつと多くの短い文章を書くことができた。

数々の親睦の場も特筆すべきだろう。スラ研の夏のバーベキュー、学生たちと一緒に出かけた2回の散策(2度目はJR札幌駅そばのラーメン屋で締めくくった)、田畑さんと池炫周直美さん（大学教員で、バンクーバー生まれのコリアン系女性）と一緒に参加した土曜の朝の激しいサッカー。トマス・ラフーセンと共同でカナダ建国記念日のお祝いを主催して、白鑞製のジョッキでローウェンブロイが飲めるドイツ風のパブにセンターの教員と院生を招いたこともあった。

カナダ建国記念日のお祝い

最後の親睦の席は、スラ研で唯一の女性教員（いちばんの若手でもある）の高橋沙奈美さんと御主人でアゼルバイジャン研究者の立花優さんを私たちのアパートに招いての晩さん会だった。私たちがスラ研を去る前日の8月28日のことである。沙奈美さんには「マープルズさん、ありがとう」というメッセージで飾られたケーキをいただいた。しかしながら感謝すべきなのは私のほうではないだろうか。札幌での世話役や新しい友達の皆さんに対して、そして複雑な過去を持ち、伝統と近代が融合し、丁重さと形式性とワイルドな気ままさが対照をなすこの特異な国に対して。ありがとうございました、またお会いしましょう！

（英語から越野訳）